

自然災害が続くインドネシア。二〇〇六年五月にジャワ島中部で発生した地震は、ジョグジャカルタ市とその近郊で約五千七百人の死者を出す大きな震災となった。

ジョグジャカルタはインドネシアでも有数の古都だ。伝統的な宮廷文化や歴史的遺産を多く持つことで知られ、訪れる観光客も多い。

古都を襲った震災に対し、国内外からたくさんの方の関心と支援が寄せられた。ジョグジャカルタ特別州（州都・ジョグジャカルタ市）と友好提携を結んでいる京都府でも、府内の小中学校から府庁まで、さまざまな団体や個人が支援活動を行ってきた。

支援者と被災者を結ぶ上では、被害状況と支援活動に関する正確な情報が欠かせない。

地域から読む現代

グローバル化の中で

1

山本博之

揺れる古都

（ジョグジャカルタ）

地震発生から十日間、被災地では停電でテレビが映らなかった。ラジオ放送は入ったが、乾電池が値上がりして入手しにくくなった。主な情報源は新聞で、全国紙が地震し役になったのは壁新聞

だった。地元の地方紙が被災地をまわり、情報を集めるとともに、街道沿いの掲示板に毎日の紙面を貼り出した。

地元NGO（非政府組織）が震災後に無料配布したかわら版も、被災者が情報を手に入れるのに一役買った。かわら版には、自宅の簡単な耐震補強の方法や保険申請の手続きなどの情報に加え、被災者を励ます読み物が掲載された。ジョグジャカルタの地元住民であるジャワ人の美徳として

「他人の助けを借りず自力で解決すること」が繰り返し強調され、外国の支援団体からの義援金を受け取らなかった被災者の話などが美談として紹介された。



ヤカルタの地元NGOにとって、今回の震災はジャワ人の伝統文化である自立の精神をインドネシア全国に示す格好の機会でもあったのだ。

他方で、被災者には外国の支援に期待したい気持ちもある。震災直後の被災地では、倒壊した建物の屋根や壁に「ヘルプ」などと支援を求める英語のメッセージがいくつも書かれていた。今回の震災ではパティック（ジャワ更紗）の職人たちの被害が大きく、伝統文化を守るには外国からの支援に頼っても遅やかな復興が必要だという声も聞く。

自分たちが誇るべき伝統文化とはどれのことを指し、それをどう発展させていくのか。震災を契機に、伝統文化のあり方をめぐって古都が揺れている。（京都大地域研究統合情報センター准教授）



被災地の壁新聞に見入る住民（二〇〇六年八月、インドネシア・ジョグジャカルタ市）

自立と支援のはざま



やまもと・ひろゆき氏
1966年千葉県生まれ、東京大学大学院博士課程修了。2006年から現職。専門はマレーシア現代史。著書に「脱植民地化とナショナリズム」。